

ホールでの懇親会は、二時間ほどで終わった。

デニスを筆頭とする本館の要人たちは、学生たちの見送りの拍手を背に学園を出、街へ下って南口に停めていた馬車に乗り込んでいった。

「もうお帰りとは。もっとゆっくりされていけばいいのに」

あとはデニスが乗り込むだけとなった馬車の前で、分館長が残念そうに言った。

「すまないな。そうしたいところなのだが、邪獣の調査をしなくてはならなくてね」

デニスは苦笑し、「次に来る時には、街を案内してくれ」と言った。

分館長は「ええ、ええ」と頷いた。

そこでふとデニスは、見送りの人々の中に、ロインの姿があるのを見つけた。

デニスは手のひらを上げて指を何度か折り、ロインを呼んだ。

ロインが恐縮しながら歩み寄ってくると、デニスは爽やかに笑って手のひらを出した。

「手続きはこちらでしておく。身辺の準備が出来たら、ネイクスへ」

「はい、ありがとうございます……！」

デニスとロインは、固い握手を交わした。

「有意義な成果があったらいつでも知らせてくれ。君の研究には期待しているよ」

デニスの言葉に、ロインはもう嬉しくて仕方がなかった。「はい、はい！」と頷きながら、たまらなくなつて、

「そうだ。有意義な情報かはわからないのですが……」

「なんだね？」

「この間、『アリーベ』に人が漂着したんです。『ノア』という名の少女です。海流解明のヒントになるかもしれない存在で——」

「少女が、漂着した？」

これまでずっと落ち着き払っていたデニスの声が、ほんのわずかに大きくなる。

「え、ええ」

ロインは頷いて、

「私も昨日、初めて会ったんです。私の友人たちが連れてきました。残念ながら彼女には記憶がなく、どのように『アリーベ』に流れ着いたかまではわかりませんでした……」

「……」

デニスは顎に手を当てて、考えるふうにした。何かを深く思案している——傍から見ても簡単にそう察しがつくほどの時間を置いて、

「……今、その少女はどこに？」

「今朝、街を発って『パルバ港』へ向かいました。もしかしたら彼女は難破船に乗っていて、港であればその情報が掴めるのではないかと」

「なるほど」

デニスは振り向き、ステップに足をかけた。馬車に乗り込んで窓を開け、ロインに本館への招待状を渡した。

「もしまた会うことがあったなら、君の友人たちも本館に招待するといい。その子の身元を明かせるかもしれないからね」

ロインは大きく頷き、「必ず！」と言った。デニスも応えるように頷いた。

御者が手綱を打ち、馬車がゆっくりと動き出す。

陽光をまとった、温かな風が吹いた。街から離れていく馬車の背をロインは見つめ、「やるぞ……！」と、拳を握った。